

# ロールキャベツ系のセフレから、エネマ グラを使って3回寸止めされた後、敏感 な前立腺をゴリゴリ擦られて前でも後ろ でもイカされまくった話

## 体験版

見た目優しめ中身は肉食系青年×流され系ちょろ青年

攻め 冴助 さすけ

受け 実影、みかげ、みっくん

「ねえねえみっくん、今日ね、コレ使ってみたいんだけど」

「なにそれ？」

土曜日の夜は、僕らのお決まりでお楽しみの日。一緒にご飯を食べるわけでもなく、集合場所は直接ホテルの部屋。あけすけな関係が成り立つのは、お互いがそういうマチアプで出会ったのがきっかけだから。32歳で、仕事はIT関係なことと、名前くらいしか知らない彼。それすらも全て嘘かもしれないけれど、深追いはしないし、彼も僕のプライベートなことにはほとんど

聞いてこない。私生活にほぼ介入しない体だけの関係。だけど、身体の相性もいいし、話は合うから、僕にしては冴助さんとの関係はよく続いている方だと思う。

そんな彼がバックから取り出してきた謎のものは、妙に曲がりくねったプラスチックの器具だった。見た事もない白いモノを手渡されて、僕はひっくり返したり、触ってみたりして首を傾げた。使う、ということだから、おそらくアダルトグッズなのだろう。あとは、使われる側が僕なのは多分確定だ。ただ、使い方が分からないけれど。

「コレが何か分からないけど…。痛いやつ？」

「痛くはないと思う。俺のが入るなら、このサイズは余裕でしょ」

冴助さんが本当に32歳なら、僕より3つほど年上になるけれど、こういう時に敬語だと白けるからということで、僕らはくだけた口調で話している。ちなみにそんな彼のブツは中々立派なのだけれど、なるほど、ではこれは僕に入れるものなのだな、とここで分かる。

正直、得体の知れないものを入れるのはちょっと怖い。けれど、本当にただのプラスチックの塊だし、細いし、長くもない。まあ、どうなるか分からないけれど、先は丸いし、少々無理をされても怪我はしなさそうだなと、僕は使用することを了承する。

「うん、いいよ。そんな危なくなさそうだし」

「さすがみっくん、話が分かる人。心が広いとこ大好き」

白い器具を彼に返すと、冴助さんはついでに僕を抱き寄せて、後頭部を撫でてくれる。逆らわずに僕も彼を抱きしめると、そっと口づけが始まった。こんな風に甘やかされたり、することに対してためらいがないのは嫌いじゃない。甘ったるい話よりも、気持ちいいことが優先の僕らは、ひとつきっかけがあればすぐにそういう流れになる。

アルコール入りのウェットティッシュで拭かれて除菌された白い器具は、さっそくローションで濡らした僕の後ろにあてがわれた。いきなり入れるんだと思ったけれど、実際太さは親指ほどもないし、僕も経験値は高い方なので、息をゆっくり吐きながら受け入れる。

「ん、んん…」

「どう、変な感じする？痛いとか」

「痛くはないかな？なんか入ってるな、とは思う」

「なるほどね。痛くないなら大丈夫だと思う。でもいきなり動かすとあぶないみたいだから、馴染むまでちょっと待つね」

挿入を終えると、仰向けで寝転がっていた僕のとなりに、コロンと冴助さんが横になった。そのまま、入っているモノには触らないようにしながら、キスをしたり、身体をまさぐったりしてくる。僕も横向きになって、彼を抱きしめたり、既に固くなり始めている冴助さんの熱に触れたりした。

「もし、あんまり痛くなかったり、違和感が減ってきたら、お腹に力を入れたり、抜いたりしてもらっていい？」

「でもあんまりいきんだら、出てきちゃわないかな？」

「最悪抜けたらまた入れてあげるから。最初からきつくしたら痛いかもしれないし、ゆっくりやってみて」

「ん、うん…」

ある程度時間が経つと、冴助さんが言うように違和感は減ってきた。なのでよく分からないけれど、彼の言う通り、お腹に力をいれては抜き、深呼吸を繰り返す。だけれど、僕はてっきり、冴助さんがこれを動かして楽しむためのものだと思っていたのに、抜けかけた時意外はほぼ触ってこなくて困惑した。一体彼は、僕になにをさせようとしているんだろう。

「あ、あの、これ、なんの意味が、あるのかな…？ん、言われた通り、してるけど」

「続けてればそのうち分かるよ」

「冴助さんは、見てて楽しい？」

「みっくんの変化を見るのは楽しいかな？」

ふふ、と笑う彼は、いつもよりも柔和なくらいだった。しかも普段なら、もっと僕を愛撫したり、若干Sっ気があるから意地悪なことを言ってきたりするのに。今日はいつもと違って調子が狂うなど、困ったため息が出た時だった。

ビクンと、僕の身体が無意識にこわばった。あれ、今なんだかと自分の下腹部に目をやる。すると横にいた冴助さんが、そっと僕のお腹をさすってきた。

「え...！？あ、れ、今」

「平気平気。ほら、みっくん。力入れて、抜いてってして？」

「ん、んんっ、や、やる、やるけど、なんか...！」

「うん、うん、上手だね。そのまま続けて？」

「は、っ、あ、は、はあ、はう、んんん...！」

ふ、ふ、と先ほどよりも呼吸が荒くなる。それでも、違和感はある程度痛みがないならと、冴助さんの言う通りにした。それなのに違和感は、気になる程度のものから悪化していく。明確に気持ちいいものだとは理解できるレベルに達するまで、あまり時間はかからなかった。まずい、何かこれはまずいかもしれないと、自分の中で少しずつ心配になる。一旦やめたいと、僕は冴助さんの腕を掴む。

「ね、え、待って、これ、なんか、変、変だって...！」

「どうしたの？変って何が？」

「な、中、が、震え、て、いや、なん、なんかあっ！」

「分からないよ、みっくん。これが悪さしてるのかな？」

「んひいいいっ！！！」

そして違和感が大きな快感へと決定的に変化したのは、冴助さんが僕が握っていない方の腕を背後に回して、白い器具をぐいっと押してきた時だった。プラスチックの先端が、ゴリッと良い場所を押し上げる。あまりにも急に強くなった刺激に、思わず声が出た。今、そんな悪戯をしてこなくていいじゃないかと思う。ヤバい、今のは何か本格的によくなかった。一旦気を落ち着かせなければと、慌てて息を整える。

でも息を整えても、快感は弱くならなかった。むしろ、一度おかしくなった中の様子がどんどん狂っていく。力を抜いても、棒のでっぱりが僕の会陰を押してくる。なんだよこれ、外側の方も変なつくりなのかと唇を噛む。それならと力を入れてしまえば、今度は中に入っている丸い先端のところが、僕の前立腺をぐりっと押してくる。だめだ、力を抜かなければ。いやでも、力を抜いたとしてもと、僕は段々余裕が削られていく。

「んは、はっ、はっ、はうううう...！あ、や、だ、冴助さ、こ、これ、抜きたい、一回抜きたいいいっ！」

「ダメだよ、せっかくいい具合になってきたのに。もうちょっと我慢して？」

「っ、む、り、無理、あう、っ、なんかやだ、ずっと、ずっと気持ちいいっ！気持ちいいの終わらなくなってる！」

「大丈夫だって。ほら、吸って、吐いてってやらないと。お腹のここ、きゅんきゅんさせてるから辛いんじゃない？ちゃんと息して？」

「あ、あう、っ、は、は、あ、で、きな、も、できないいい...！あふっ、う、うあ、やだ、やだあああっ！」

「あ、こらこら、自分で抜こうとしないの。今が一番いいとこなんだから。ズルしちゃだめだよ？」

「うはあああああっ！！ああああああダメダメっ！中、いれな、あ、あんんっ！！」

脱力しても気持ちいい、力を入れても気持ちいい。ならばと抜こうとしても、冴助さんが押し込むから抜くことはできない。逆にわざと動かされたりすると、より快感が増えていくからなおのこと自分を追い詰めている気がする。

じわじわと、何かが迫ってくる気配を感じる。息が荒い。深呼吸はずっとできていない。浅い呼吸を繰り返して、時に声が裏返る。その様子を満足そうに見る冴助さんが、悪戯に器具を押し込んだ。

その瞬間、びりりと何かが背筋を駆け抜けた。頭に到着した何かは、ガツンと僕の頭を揺さぶる。

「あ、あぐ、うううううっ！！！！？」

視界が白く霞んだかと思うと、僕の全身は不思議な力で引っ張られたみたいに突っ張った。緊張した足が、自分の意志では戻らなくなる。

「っ！！！！？ひっ！ひうううっ！！」

「うんうん、上手にイケたね。みっくんなら、初めてでもそうなれると思ってた」

「んんんぐっ！！は、ふ、ひっ、な、い、これ、ま、あゝ、冴助さ、あ、抜いて、一回抜いっ、ひ、ひいいいっ！！！」

ビク、ビクと勝手に体が跳ねる。なぜそうなっているかも分からないけれど、暴力的な気持ちよさが僕を襲っている。原因は、多分お尻に入るものだと思う。だけど、ただ入っているだけのコレが、なぜここまでの快感を僕に生み出しているのか分からない。ただのプラスチックの塊だと思っていたあれは、一体何だったんだろうか。

「んっ、あ、あ、ま、っで、な、あ、何、これ、なにいいいっ！！！」

「みっくんに入れてもらってるのは、エネマグラって言ってね。まあ簡単に言うと、前立腺を刺激してくれる医療器具？みたいなものかな。それ入れておくと、たくさん中イキができるって聞いたから、試してみたくて。どう？気持ちいい？」

「うああああっ！！！！？やめゝっ、ん、んんんっ！動かさな、い、いうっ！！あひっ、だめ、だめだめだめええええっ！！！」

こちゅこちゅと冴助さんが軽く出し入れしただけでも、僕の中のいい所がゴリゴリとされて目まいがした。エネマグラ、なんて聞いたことがないけれど。今自分に起きているのが何よりの証拠だと思うから、前立腺を刺激する器具なのは本当だと思う。気になるとすれば、「たくさん中イキができる」ことに上限があるのかどうか。もし、何回くらいは連続でイケるらしいという前情報がないなら、延タイキ続ける可能性もあるのではと身震いする。

よくない、入っている間イキ続けるなんて考えたくもない。こんなにいらない、こんなに気持ち良くならなくていいと、僕は冴助さんの腕を握って首を振る。

「はあ、あ、あ、あううう`う`う`ううう...ッッ！！っは、あ、あ、も、もお、もおおお...っ！い、イッた、ぎもち、い、からあっ！ぬい、て、抜いてよおおおっ！！」

「でもみっくん、気持ちよさそうだし。もう少しこのままでもいいんじゃないかな？」

「やあっ！も、いい、いいからっ！」

「でもほら、ここは勃起っばなしだし。苦しいなら萎えてもいいのに、固いままってことはさ。やめたくないってことなんじゃない？」

でも、僕の願いは聞き入れてもらえなかった。しかも、勃起しているのを指摘されて更に恥ずかしくなる。苦しいとは思っているけれど、身体的には萎えることがないのは生理現象なのだろうか。

いや、だけどいっそ、一回射精したら。溜まっているものがなくなれば、スッキリしてこの中イキの波も収まるかもしれない。アリだな、それはアリだと、僕はお願いの方向を変えることにした。

「っ、ね、ねえ、冴助さん、僕、イキたい、前でイキたいいい...っ！」

「そう？両方でイッたら辛い？」

「っ、らく、ない、あう、辛いからあっ！イキたい、出したいの、お願い、い、出させて、触って...！」

「分かった。じゃあ前は俺が触ってあげるから、みっくんはこっちに集中して？」

「ひうううっ！」

僕の快感を減らすことは否定されても、強まる分には許されるかもと予想して交渉したところ、狙い通り冴助さんは前を触ってくれた。その前につるんとお尻を撫でて、エネマグラを押し込んできたのは意地悪だったけれど。それでまたイッてしまったけれど。一歩前進したので、ここで何かを言って機嫌を損ねるくらいなら、このまま射精まで導いてもらう方が得策だと思う。

ただし、冴助さんは触ってくれるとは言ったものの、なぜかソフトな触れ方しかしてくれなかった。なんなら、ソフトな中でもかなり優しいぐらいの。どうして？と僕は思った。いつもならしっかり握って扱ってくれるのに。今日の彼は握りはしても、緩く上下に擦って、後は手のひらや指で撫でるばかり。なんで？なんでそんなにいじらしい触り方を？と困惑する。

ぐう、と喉が鳴った。暗に欲しがら声が出る。もっとちゃんと触ってほしいのにと、彼を見つめてすがりつく。

「な、んで...っ！？も、もっと！もっと触っ、て、え、そんな、やだ、やだあああ！」

「そう？嫌ならやめる？」

「うあ...！」

けれど文句を言えば、パッと手が離れてしまった。それはなお酷くないかと、彼の胸に額を擦りつけて悶えた。中途半端に刺激された熱が、たらりと先走りを零している。もっと欲しい、これじゃあ満足できないと泣いているみたいだ。

「やだ、触って、ちゃんとしてよお...！」

「触るよ？みっくんがお尻にちゃんと集中したら」

「んんぎっ！！？」



「役割分担したのに、触って触ってばかりになってない？みっくんはこっちで気持ちよくなるんだよ？あ、もしかして忘れちゃったのかな？もっとココで気持ち良くなれないと覚えられない？」

「うあっ！！ああああっ！！まっ、それ、んんんっ！！は、あひっ、っいいいいっ！！  
や、め、まっ、待っ、〜〜〜〜ッ！！！！〜〜っ！！！！！！？？」

でも、触ってほしいのはあくまで僕の我儘だ。一方ばかりが得をする話には乗れないと、冴助さんはエネマグラを思い切り押し込んでくる。ぐりい、と圧迫された前立腺は、そこから大きな快感を生み出した。パチパチと頭が弾けて、一瞬呼吸を忘れる。それにもかまわず何度も押し込まれると、ビクン、ビクンと身体が奇妙にのけぞっては、出したこともない喘ぎ声が出てきた。

文字通り、息が止まる。そんなにグリグリしないでと、咄嗟に冴助さんの腕を掴んでいた。はひゅ、と怪しい呼吸をしながら、約束は忘れていないことをどうにか訴える。

「まっ、で、それ、あ、あああうううっ！！す、る、僕、ちゃんと、するからああっ！！  
お、ひり、自分でっ...！だ、から、も、やめゝえ...ッ！！」  
「そう？忘れてないなら大丈夫か。じゃあ、前も触ってあげようね」  
「んひ、いいいいいい.....っ！！」

ただ、触ってもらえればイケるのに。決して楽はさせてもらえない。どのみち射精することで楽になるのかも分からない。でも今よりはきっとマシになるはずだからと、僕は自分でお尻を締めたり、緩めたりした。そのせいでまた中イキを繰り返すことになるわけだけれど、かわりに冴助さんの手は前に動く。僕の熱に触れてくれたので、確かに事態は好転したと思ったんだ。

「あふ、う、うあ、ああああ...！んんんぐっ、ッ、は、は、ああイク、イク、イッ  
ちゃ、あ、あゝあ...！！！」

彼が雑に扱いたとしてもイケるくらいには、僕の熱は張りつめている。だから、もう少しの辛抱だ。イケる、このままイケると、ぐっと下腹部に力が入る。そのまま彼の体に抱きついて、いざ溜まった欲を吐き出そうと目をつむった時。

あと一回でも擦ってくれたらイケたはずの場所から、パッと手が離れていった。

「っ...！！？っ、あ、ああ...！？」

続きは本編にてお楽しみください！